



くろはえ  
**黒南風の八幡**  
ぼはん

隻眼の海賊と  
バードレ  
宣教師の秘宝

## 序章 主よ、この魂に憐れみを

---

深い霧の中を一艘の小船が行く。櫂の音だけが響いている。

船の上にいるのは一人の痩せた男である。焼けた素肌の上に胴丸を付け、髪の毛を結いもせずにはばらりと垂らし、額に薄汚れた布を巻いて右眼まで覆っている。左眼は黄色く濁って深く落ちくぼみ、こけた頬には無精髭を生やしている。男は櫂を漕ぐ手を止めて、じっと霧の向こうを見た。息を止めて耳を澄ますと、わずかだが子供の声が聞こえた。微かな吐息で歌っている。

――きりやれんず、きりすてれんず――

男はしばし目を閉じて、それに耳を傾けていた。そして声のする方向に船を向けた。

霧の中に、大きな灰色の影が迫ってくるのがわかった。切り立った岸壁であった。

岸壁の麓に、五本の柱が立っていた。そこに女たちが裸で磔にされていた。白い足を黒い波が洗っている。すでに皆、息絶えていた。身体は水に青白く膨れて、肋骨や目玉のあたりを烏がついばんだ跡があった。

その中央の柱に磔にされていたのは、まだ十歳に満たないくらいの娘であった。この娘は生きていた。しかし、目玉はすでに烏につつかれたあとで、赤黒い固まりになったからっぽの眼窩を、海の彼方に向けていた。白い唇が微かに震えている。

――あんめい、いえぞす、まりあ――

男はそれを水面から見上げる。

まもなく潮が満ちる。そうすれば波はこの娘の頭を洗い、その命を奪うだろう。

娘はすぐ近くに男がいることに気付かない。無心に歌を口ずさみ、そのときを待っている。

男は胸に十字を切った。そして再び船を返し、霧の中に帰って行った。

――きりやれんず、きりすてれんず――

男はキリシタンではない。だが、その歌の意味は知っている。

「主よ、この魂に憐れみを」だ。

寛永四年（西暦1627年）五月、肥州平戸藩。

一人の若者が、オランダ商館へと向かう道を急いでいる。かるさんを履き、腰には大小の刀、手には風呂敷包みを抱えた茶筌髪青年である。彼は武家の奥方の一行とすれ違おうと、ぴたりとその場に立ち止まり、深々と頭を下げて丁寧な挨拶をした。「これが評判の種稻殿か」と若い女中たちが色めき立つが、青年はその様子には気付かない。若者の名は種稻右近という。平戸城下の刀匠の一人であった。

その日は朝から陰鬱な薄曇りで、今にも雨が降り出しそうである。道には、まだ一昨日の雨が作った水たまりがいくつも残っていた。右近はそれらを次々と片足で飛び越しながら先へと急ぐ。

風は強く、水たまりの水面さえさざめいている。

右近の足は自然と早くなった。今日は潮の匂いが一段と濃い。鼻の中が塩辛いくらいに感じら

れた。

「黒南風だな」と、右近は思った。

黒南風は、夏の初めに梅雨を伴ってやってくる南からの重たい風だ。この風に乗って雨雲がやってきて、ツバメが飛来し、琉球の船が寄港し、平戸の城下に夏の訪れを告げるのだ。

平戸のオランダ商館は、海を臨む高台の上にあった。阻むものが何もないので、風は一層と強く、右近は思わず身をかがめる。その姿勢のまま門を叩くと、すぐにそれを日本人の通詞が出迎えた。夏物の単衣にオランダ風のかるさんを履き、羅紗の帽子を被っていて、至極奇妙な出で立ちであるのだが、これも平戸では日常の風景に変わりつつある。

「ご所望の品をお届けに参りましてございます」

右近がそう言って、手にした風呂敷包みを見せると、通詞は笑顔になって右近を中へと案内した。

右近がいつも決まって通されるのは、裏手にある炊事場を兼ねた小さな屋敷である。ここは城下の古い武家の屋敷を移築したものであるから、右近はいつもここがオランダ商館だとは思えない。敷地内の他の屋敷はすべてオランダ風であるというから、覗いてみたい衝動に駆られるのだが、一介の職人が商館の中をうろつくわけにもいかない。しかし、右近の決まって通される座敷からは、正面の障子が開いている日には、商館の表の庭が半分ばかり見えるから、右近はそれでいつも我慢する。幸い、この日も障子は開いていた。回遊式の日本庭園の中に、小さな薔薇園があり、石灯籠の横に鉄製の柵が立てかけてあるからおもしろい。

右近は風呂敷を解いた。通詞の目の前で長い桐箱の蓋を開ける。中にあるのは、青白く鍛え上げられた刀身である。右近がそれを取り出して、庭のほうにかざしてみせると、雲間に差したわずかな日の光をすくい取って、水滴が弾けるように光った。通詞は感嘆のため息をついた。

「いつも素晴らしい」

通詞は言った。

「あなた様の腕は確かにございますな」

「そんな、滅相もないことでございます」

右近がそう答えると、通詞は首を振った。

「紅毛人に鍛える刀はないと、そう申す鍛冶師も城下には多うございますよ」

右近はそれを聞いて、思わず苦笑するしかなかった。

刀は武士の魂である。それを鍛える鍛冶師は、その魂を練り上げる者である。右近の種稻家も、長く平戸藩主松浦公に仕えた功績と、腕の確かさから、父の代に苗字帯刀を許された刀匠の家柄である。家格は士分に相当するから、「武士の魂たる刀を何故、紅毛人に」と言う者の気持ちがわからないわけではない。

西洋では、刀は美術品として高値で売買される。だからオランダ商館は、良質な刀を欲しがる。そうして買われた刀は、海を渡り、どこか遠い国の金持ちの暖炉の上に飾られる。だから「斬ってこそその刀」と思う刀匠は、鍛えた刀をオランダ人に売ることなど考えられないのだろう。

しかし、右近は違う。彼は言う。

「人殺しの道具が、生涯、人を殺めずに済むのなら、それが刀にとっての幸せではございませ

んか」

その言葉を聞いた通詞は、面食らったようだった。

「種稲殿はまるで、キリシタンのようなことをおっしゃる」

通詞がそう言った途端、甲高い音がして右近は驚いた。風に煽られて、庭の鉄柵が倒れたらしい。

庭のほうを見やると、何人かのオランダ人が、呆れたように笑いながら、その鉄柵を起こして片付けようとしていた。だが、その向こう、少しばかり離れたところに、もう一人、他のオランダ人とは違う格好をした男がいることに右近は気付いた。

通詞は、近頃のキリシタンの捕縛の噂を語っていた。昨日は大村で、今日は長崎で、数十人のキリシタンが捕縛され、女子供を含めて悉く処刑されたというような話であった。「薄気味悪い」「早く平戸からいなくなるものか」と通詞は繰り返していた。右近はそれを聞きながら、目ばかりは庭のほうに向けていた。

遠くにいるその男は、こちらには背を向けている。手を後ろで組んで、背伸びするかのように胸を張っている。海を眺めているのだ。隅々まで、水平線の全てを視界に収めようとしているようである。

彼は黒羅紗に金モールの付いた上着を羽織り、さらにその上から金襴の布団のような、分厚い長い上着を着ている。確かヤポンス・ロックという、日本の打掛を真似した寒さよけの羽織りものだ。それは他のオランダ人が着ているものに比べて格段に立派な誂えだった。

そして、その男は大きな帽子をかぶっていた。黒羅紗のつばの広い帽子で孔雀の羽がついている。それが風に吹かれて揺れると、玉虫のような何とも言い難い色を反射して光るのだ。長い巻き毛の金髪が、その下から見えている。背中に落ちかかったそれは、城下の女性たちが見たら、「生糸のようだ」と憧れに目を輝かすに違いない。

「して、このあたりにも、宣教師(バテレン)が潜んでいるというが、種稲殿はご存知かな」

通詞がそう言ったので、右近の意識は庭から引き戻された。右近が聞き返すと、通詞は少し口の端をあげた笑い方をした。右近は言った。

「何故、それを、私に尋ねようということになるのです」

通詞は答えなかった。

そのとき、庭にいた孔雀の羽の帽子の男が、こちらを見たような気がして、右近は顔をあげた。だが、そこにはすでに、誰もいなかった。

右近はその足でまっすぐ自宅に戻った。

右近の家は二間しかない。士分にふさわしくないと同輩にはたしなめられるが、十分な収入があるわけではないから分相応であると右近は思っている。しかもその家は郭外にあって、周囲はすべて畑で、すぐ裏手は深い山になっているから、人の訪れもあまりない。近くに住んでいる者はわずかばかりの年老いた水呑百姓だけで、付き合いらしいものもない。

家に帰り着くなり、外はみるみるうちに暗くなって、とうとう雨が降り始めた。

右近は急いで戸を閉めると、天井を見上げた。もう雨漏りが始まっている。右近が割れた鍋を叩き石に置くと、しずくがそこに当たって、小気味よい雨音が何度も響く。

土間でかるさんの埃を払って、座敷にあがろうとしたとき、右近は、「母上、只今戻りました」と言いかけていることに気付いた。右近は、口を開けたまま、誰もいない座敷の畳を、ただじっと見るのであった。

右近の母は、長い療養の末に先日逝ったばかりである。父親は右近が幼い頃に他界したため、ずっと二人きりであった。母を失うことなど考えも付かないくらいに甘えて育ったが、その母も、もう十年は寝たきりであった。しかもそのうちの二年は、右近の呼びかけにもあまり答えなくなっていた。

世間では寝付いた病人を疎ましく思う家族もいるというが、右近には、むしろ幸いであった。少しずつ弱っていく母の顔を手拭いで拭き、粥を口に含ませ、着替えを手伝ってやることができた。十年をかけて、そうしてゆっくりと母の死に心の準備ができていった。「これこそ、神(デウス)に与えられた福音ではないか」と、右近は思った。

右近は座敷にあがると、母が寝ていたあたりの畳を、深く踏みつけないように歩いて、奥の仏間に入っていった。仏壇に線香をあげて、手を合わせると今日の報告をする。そして、仏壇の奥の厨子を開けた。

中には、まりあ観音と銀製のくるすが納めてある。

右近はごく小さな声でおらしょラテン語で「祈り」を唱えるのであった。

母の葬儀はすでに近くの寺で済ませてある。しかし、本当の葬儀はまだだ。月のない雨の夜を狙って、役人の目の届かないところで、静かに行わなければいけないからだ。できれば、司祭(パードレ)に祈りを捧げて貰いたいが、それも難しいだろう。

右近は厨子を閉じた。

そして仏間を出ようと仏壇に背を向けたが、妙に気になってもう一度振り向いた。

右近はじっと仏壇を見つめる。

朝、家を出るときに、庭の枇杷の木の枝を手折って、仏壇に供えた。その枝には、まだ固そうな枇杷が、三つ付いていた。

右近は、仏壇に近付くと、その枝を手取る。

実が二つしかついていない。

「まだ固くて食べられたもんじゃない」

突然背後から声がしたので、右近は振り返った。

見知らぬ男が立っていた。

痩せているが、筋肉質で背の高い男であった。焼けた素肌に胴丸を付け、その上から百姓の野良着のような着物を着て、さらにその上から南蛮風の陣羽織を着ている。腰には大小の刀、のように見えるが、種子島火縄銃のこと。と脇差しを、大小の刀のようにして金欄の博多帯に差していた。さらに馬手の腰には南蛮渡来の短筒が見える。

「枇杷を一つ頂いた」男は右近にむかってそう言う、「仏様に悪かったかな、いや、さては神(デウス)様か」

右近が刀の柄に手をかけると、男もまた身構えた。

脂ぎった髪はまるで若布のようにぬらぬらとしていて、それを結いもせず肩に落としている

。額には、薄汚れてかぎ裂きになった布を巻いていて、それで右眼まで覆っていた。残った左眼のほうは黄色く濁っていて、目脂でひどく汚れていたが、異様な光を放って右近を見ていた。いかにも無頼の輩の風体であるが、それよりももっとひどい。

「ここで何をしているのだ、珍妙なやつめ」

右近がそう言うと、男は至って真面目な様子で、「珍妙とは失敬な、独創的と言ってくれ」と言った。

「ちょっと腹が空いたもので、民家に入って物色中のところ、お前が帰ってきた。そこで今まで納戸に隠れていたというわけだ」

男はそう言うと懐に手を入れたので、右近は刀を抜こうとした。すると男は手のひらをかざすと慌ててそれを制した。

「飛び道具なんか出すもんか。俺は卑怯な武器は嫌いなんだ」

右近は「その腰の鉄砲と短筒はなんだ」と言ってやりたかったが、兎角、この奇妙な男から目が離せない。足元はふらふらとして酔っぱらっているようにも見える。

ただの変人ならば追い出せばいい。盗賊ならば捕り方を呼ぶまでだが、右近としては、この家に役人を入れるのは嫌だった。

そんなことを考えていると、男は懐から金の鎖を取り出した。右近は仰天した。

右近の父の形見の南蛮数珠である。男はさらに、粘土で作ったきりしと像や、禁制となった写しの『どちりな・きりしたん』の冊子などを取り出して、右近に見せた。

「隠し場所として納戸というのは、あまり賢くないな」

右近は咄嗟に男の手からそれらを奪い取った。男は抵抗もしない。ただ黙ってされるようにしていた。だが、右近を見下ろしてこう言った。

「俺は誰にも何も言わない。お前も何も言わない。それで取引成立ということで、如何？」

右近は答えた。

「盗賊を見過ごすことなどできない。役人を呼ぶ」

右近は男を残して土間に出ると、戸を開けた。その瞬間に、後頭部に固いものが押しつけられた。振り返ると、男は短筒を構え、右近の頭に狙いを定めていた。

「驚かないところを見ると、短筒を知っているのか」

男は少し口の端をあげてそう言った。笑うと、汚れた黄色い歯が覗く。右近は答えた。

「オランダ商館で見たことがある。それはオランダ製のマスケット銃だ」

右近がそう言うと、男は感嘆の声をあげた。右近は続けてこう言った。

「しかもその短筒には、弾が入っていない」

男が驚いて銃口を覗きこんだ。次の瞬間、右近は脇差の柄頭を思い切り、男の下顎に叩きつけてやった。男は大の字になって土間に倒れ込んだ。